

日本語学習者による俳句・川柳の創作活動
 HAIKU AND SENRYU CREATIONS BY JAPANESE LANGUAGE LEARNERS

水戸淳子, 香港大学
 Atsuko Mito, University of Hong Kong

1. はじめに

これまで俳句や川柳を使った日本語の授業実践として、日本の大学で学習している留学生を対象にした徳井（1997）の授業や、アメリカの大学で中上級レベルの学習者を対象に行った黒川（2008）の試みなどが報告されている。日本語学習に俳句を取り入れるねらいとして徳井（1997）は、①リズムに慣れる、②イメージを喚起する想像力を養う、③語彙力を増やす、④日本文化の理解を深める、⑤自己と向き合う、の5つを挙げている。また、黒川（2008）は自身の授業実践を振り返り、「多少抽象的な概念や日常生活とは少し異なった観点からコミュニケーションをする機会を与えることは、上級へ向かう学習者への課題として適しているものと思われる」と述べている。

筆者はこれまで初級後半の学習者に対して俳句や川柳の創作活動を取り入れた授業を行ってきたが、初級後半という段階であるにも関わらず、彼らの表現力の豊かさ、巧みさ、斬新さに驚かされることも多くあり、こういった活動が彼らの語彙力や表現力を引き出すことができるようにも思っている。本稿では、筆者が実践しているこの活動について報告する。

2. 授業の概要

この活動実践の導入を試みたのは、筆者が担当している「Japanese for effective communication」というコースの中である。この授業全体の三分の一ほどの時間を使って、俳句・川柳の創作に関連する内容の授業を行った。

このコースは、日本語の必修コースに付随する形の選択科目で、必修コースで初級後半（『みんなの日本語初級Ⅱ』36課～50課）を学ぶ学習者を対象としているが、実際には履修者の中にはこれ以上の学習レベルだと思われる学習者もいた。また、コースの履修者は、日本語を専攻または副専攻しており、学年は2年～4年生までまたがっている。

このコースでは、様々な活動を通して学習者の *productive skills* を上げることを目標としており、主にスピーキングとライティングの力を強化することをねらいとしている。また、スピーキング・リスニング力向上の一環として、日本語の音声についての理解を深めることも目標の1つに掲げられている。

3. 活動の流れ

この活動は、主に以下の四つに分けられる。①「日本語の音声についての学習および練習」、②「俳句、川柳、短歌についての学習・鑑賞および創作」、③

「発表会」、④「各発表者へのコメント書き」である。各項目について、以下に詳しく述べる。

3-1. 日本語の音声についての学習および練習

これは、その後に続く俳句等の鑑賞や創作、そして発表会のための準備として位置づけられていると同時に、日本語の音声についての体系的な知識を得て、これまでの自分のスピーキングやリスニングを振り返ってもらう機会としている。背景として、中国語を母語とする学習者がほとんどであり、リーディングを得意としている学習者が多い反面、発音を含めた実際のコミュニケーションに苦手意識を持つ学生も少なからずおり、音声面での指導が効果をもたらずということが挙げられる。学習者のほとんどが広東語を中心とする中国語を母語としているため、特に彼らが苦手とする点や戸惑う点を中心に指導を行っている。

具体的な項目としては、『国際交流基金日本語教授法シリーズ第2巻 音声を教える』（ひつじ書房）を参考にして、特殊音（長音、促音、撥音）、外来語子音、有気・無気音と有声音・無声音、母音の無声化、ガ行鼻濁音、拍とリズム（二拍フット）、アクセント（中国語の声調、強弱アクセントとの違い）、イントネーションを取り上げた。特に、俳句や川柳の鑑賞・創作にとって鍵となる日本語の拍感覚については、特殊音の発音とともに重視した。

3-2. 俳句、川柳、短歌についての学習・鑑賞および創作

この活動では、まず『みんなの日本語初級Ⅱ 初級で読めるトピック 25 第46課 プラスアルファ 俳句』を使い、そこに挙げられている四つの各季節を代表する伝統的な俳句（「菜の花や 月は東に 日は西に」「静かさや 岩にしみいる 蟬の声」「あの月を とってけると 泣く子かな」「こがらしや 海に夕日を 吹き落とす」）を鑑賞し、五・七・五のリズム、季語、切れ字の説明を行った。

さらに、字余り、字足らずの説明も行い、季語にこだわらない現代的な俳句、川柳、そして五・七・五・七・七のリズムに基づく短歌についても紹介した。この活動では、「現代学生百人一首」、「サラリーマン川柳」、そして過去の学習者が創作したものの中から句（首）を紹介し、まず4～5人のグループで各句（首）の意味や鑑賞のポイントを話し合っ確認してもらい、その後クラス全体で共有した。学習者の想像力が喚起され、またグループ内での話し合いが活性化するように、様々なタイプのものを用意し、「現代学生百人一首」からは「秋風が 君と私の 帰りみち 手と手をつなぐ 理由をくれた」「できる子や あんたはやれば できる子や」言われ続けて 十六年」「受験費用 心配しなくて良いからと 父のメールに 涙こらえる」「将来の夢は何だと 尋ねられ 生きていたいと アンゴラの子ども」といった短歌などを、「サラリーマン川柳」からは「パパ部長 家の中では ママ社長」「減っていく ボーナス 年金 髪愛情」「「おかえり」の 笑顔のために 仕事する」「夢を持って 夢を持ったが 夢だった」などの川柳をあらかじめ選んで紹介した。

学習者はこの授業の後、まず2つの課題、①紹介された句（首）の中から自分が好きなものを選び、その理由を書く、②俳句（川柳や短歌でもいい）を3句（首）創作する、を行う。そして、②の課題の後に、③創作した3句（首）の中から教師と話し合い、発表する1つを選び、その背景を書く、という課題を行った。

3-3. 発表会

学習者は、上記の3つの課題で書いたものをまとめ、①好きな句（首）を読み上げ、それが好きな理由を述べる、②創作した句（首）を読み上げ、その背景を述べる、③質疑応答、という流れで、授業内において合計一人五分程度で発表を行った。発表時には、プロジェクターで好きな句（首）および創作した句（首）のみを提示できるようにし、好きな句（首）の「理由」や創作した句（首）の「背景」については、聴衆に視覚的な提示はせず、口頭のみによって伝えることを課した。当然、聞き取れないことやわからないことが多く出てくるが、それらは③の質疑応答で確認するように促した。これに関連して、発表の前には、本番での質疑応答に備えて、質疑応答の際によく使われる定型表現などを使って練習する時間も設けた。また、発表を聞いている間は、その後に控える質疑応答に備えられるように、メモを取らせた。

学習者は発表に向けて、これまで取り組んできた日本語の音声の知識や練習を活かして口頭発表の練習をすることになるが、教師との一対一での **tutoring session** の他に、各自で練習をすることになる。その際の便利なツールとして、オンラインでの無料学習サイトである **OJAD (Online Japanese Accent Dictionary)** を紹介し、その使用方法についても確認させ、自習の際にその機能を活用できるようにした。このサイトの「韻律読み上げチュータズズキクン」は入力した日本語テキストを読み上げるとともに、視覚的なピッチ・パターンの表示もされるため、学習者が練習をする際には大きな助けになる。しかしながら、「もう1つ食べよう」の「もう」を、「もう食べた」の「もう」と同じだと認識してしまうといったこともあり、100%の精度ではないため、あらかじめ教師が学習者のスクリプトを用いて確認をしておく必要があった。

3-4. 各発表者へのコメント書き

学習者は、発表会後に、各自の発表内容がまとめられた「創作俳句集」を受け取るが、そこでクラスメートが書いた「好きな句（首）の理由」や「創作した句（首）の背景」についても文字情報で受け取ることになる。その内容や、発表会での各発表者について各自が記したメモなどを基に、各発表者に対してコメントを書き、**Moodle** のフォーラムに投稿することを発表会後の課題とした。学習者はクラスメート全員と教師からコメントをもらい、また、これらはフォーラムへの投稿であるため、全員が全員分のコメントを共有する形になった。

4. まとめと今後の研究課題

徳井（1997）は日本語学習に俳句を取り入れるねらいの一つとして「リズムに慣れる」を挙げているが、ここで紹介した、俳句や川柳の創作を取り入れた活動のメリットの一つは、目的意識を持って音声の学習と練習ができることにあると言える。中国語のような「声調」でもなく、また英語のような「強弱アクセント」でもない、「高低アクセント」を持ち、またモーラという「等間隔の拍のリズム」で流れていく日本語の特性を体感する活動として、俳句、川柳、短歌といった定型詩はいい教材になりうるのではないかと感じられた。

また、俳句、川柳、短歌というのは短い言葉の中に凝縮された意味の世界があり、表現上省略されているからこそ、想像力を働かせる余地が多分にあり、作り手と聞き手の間で、伝えたい事／伝わった事をめぐって、コミュニケーションを起しやすいのではないかとも感じている。短い表現に込められた情緒や世界観をめぐって豊かな交流・共有ができるというのは、なかなか他にはない題材なのかもしれないと思われる。

学習者が創作した作品は、恋人や家族への思い、将来や社会への不安や不満、学生生活の喜怒哀楽、またそれらをユーモアでくるんだものから、自然や美を描写したもの、人間や人生についての洞察を表したもので様々なテーマで創作されていた。今後、こういった学習者の作品の分析などもできたらと考えている。

徳井（1997）は俳句を学習に取り入れるねらいの一つとして「語彙力を増やす」も入れているが、学習者の発表内容には未習の語彙がかなり多く含まれていたことから、筆者もこれについての学習効果はかなりあるように感じられている。発表会時に、音声のみで全ての発表内容を理解するのは学習者にとってかなりチャレンジングであり、難しさを伴っていたと思われる。しかしながら、発表後に受け取った「創作俳句集」や「コメント」から内容を文字でも確認できるので、その際に新しい語彙の習得ができていたのではないかと考えている。これについても今後の課題にしたいと思う。

参考文献

- 徳井厚子（1997）「留学生に俳句を教える—日本語・日本事情教育の中で—」信州大学教育学部紀要 90, 1-5, 1997-03
- 黒川直子（2008）「定型詩を使った日本語教育：四技能の向上を目指して」
Proceedings of the 23rd SEATJ conference 2008
- 国際交流基金（2009）『国際交流基金日本語教授法シリーズ第2巻 音声を教える』ひつじ書房
- 牧野昭子、重川明美、水野マリ子、沢田幸子、田中よね（2001）『みんなの日本語初級Ⅱ 初級で読めるトピック 25』スリーエーネットワーク
- 現代学生百人一首 <https://www.toyo.ac.jp/site/issyu/>
- サラリーマン川柳 <http://event.dai-ichi-life.co.jp/company/senryu/>
- Online Japanese Accent Dictionary <http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/>